



Sparkling Water



—
spearmint
—



「 インダイレクトキス 」

右肩にまとめていた制靴を両肩にかけ直して、7両目から6両目のジョイントへ。
空調を管理するための空気抵抗と電子音で6両目に入る。
停車位置がホームのエレベーターに近いから最も混む車両だった。
セーラーカラーの学生の間を縫いながら、日々の癖で左右の座席に目を走らせた。
時々好奇のまなざしを向けられながら、嫌悪の目で睨まれたりしながら、
そしてそれを睨み返ししながら、6両目から5両目へ。
5両目に入ってすぐ、そこで、鉢合わせてしまった。

「...おはよう」
「なんだよ、今日もかよ」

僕が言うと返事もせずに切り返してくる。それが彼の流儀だった。

「いなかった?」
「いない。1本遅らせたのかな」
アビは眉間に皺を寄せ唇をとがらせた。
ヘーゼル色の瞳もぐっと細められ、快、不快の不快の表情を作る。
過剰なまでの表情の豊かさ、それが彼のパーソナルイメージ。

「遅らせたのか、早くしたのか、欠席なのか、」
「今日で4日目だぜ? やっぱいつも通りに戻したんじゃないか?」
「そうかもしれないけど、ダメだね、今日は」
「なんでだよ。つまんねえ」

例によってシートは全て年長の生徒で埋められていたから、
(たとえ空いていても座るわけにはいかない)
僕とアビはスペースを探してドア付近に移動した。

「おまえ、見逃したんじゃないの?」

ドアにもたれ胸の前で腕を組み僕を見上げる。
ベビーフェイスだし迫力はないが、流石にそんなに大きな目で睨まれたら、どきりとする。

「見逃すわけないだろ、俺が、レンカクを」
「...まあ、そうだよな。俺だって絶対に見逃さない」

後半は独り言になってアンニュイにまぶたをふせた。
彼はレンカクに恋をしている。僕もレンカクに恋をしている。...ことになっている。
アビがレンカクに一目惚れしたのは高等部に進級した最初の日。
いつも通り5両目で待ち合わせて挨拶代わりにダルそうに片手を上げた彼が、
その数分後に恋に落ちた。
白いセーラーカラーに濃紺の2本線。同じく濃紺のカーディガン。
だから他校の生徒だというのは直ぐに分かった。
見とれた彼は、僕の靴のつま先を踏み続けていた。
息がかかるくらいの至近距離で、友人が恋に落ちる瞬間を目撃した。
と、同時に、僕の恋心の命日が決まった。

「今日も会えなかった。...つまんねえ」

唇をさらに歪めて窓の外を眺めている。
セントラルコンピュータが見せる仮想の景色を眺めている。
いまは冬期設定だから、荒涼とした雪景色が前から後ろへと流れて行く。
スクールの書庫で読んだ紙式書籍には、雪には匂いがある、と書いてあった。
どんな匂いなんだろう。想像もつかない。
水に、氷に、匂いがないのに、どうして雪に匂いがあるのだろうか。
考えようがないから、読んでいた紙式書籍の匂いが僕の想像上の雪の匂いになった。

毎朝同じチューブの同じ車両に乗り合わせていたレンカクの姿を見なくなった。
どうしたんだろう、なにがあったんだろう、と一日中持ちかけてくる彼にうんざりして、
じゃあさ、と数日前から始めた。通学時、僕はチューブの最後尾から乗り、
彼は最前車両から、レンカクを探しながら歩き、見つけたところで連絡を取り合おう、
というやり方。僕が提案して、アビが乗った。
チューブが速度を上げている。
耳鳴りのような金属音と風音、鼓膜に感じる重力。
車窓にはチューブを擬人化したアニメーションと
次のステーションまで1.864マイルの表示。

「やっぱ1本前だったのかな」
「しかたないよ。明日はそれに乗ってみようぜ」

ふて腐れ続ける彼を励ます。それも4日目。

「だるい...1時限目なんだった？」

「ジムだよ」

「ジムかよ、」

朝イチでジムなんてやられるか、と学年で断トツに
ジムナスティックスの成績が良い彼が言う。
記録会に出ないか、とことある毎に彼に持ちかけてくる教師はどんな顔するだろう。
可笑しかった。
紺色のセーラーカラーを跳ね上げ、タイ結びにし
ている白いスカーフを解いて抜き取る。
制服のポケットにねじ込み、ゆるく分けている前髪をぐしゃぐしゃと崩した。
右耳にセットしているオペラピンクのkeitai。
時刻を手のひらに表示させて、にやりと笑う。

「行こうぜ。シティでエイガやってるんだ。あと30分ある」

「エイガ？」

「エイガだよ。文化人類学で習っただろ？布製スクリーンに2D映像を投影して、音声を合わせて、
それをこっち側で...こうやって並んで観るんだよ」

「それは知ってるけど、...シティのどこでそんなこと」

「オリエンタル美術館で」

僕は左耳にセットしているkeitaiを手のひらにディスプレイして、
オリエンタル美術館前を検索する。

「次で降りれば美術館行きがダイレクトで出てる。降りて38秒後にくるやつ」

「ついてるな」

僕が言うと、彼は僕の胸元のスカーフをずるずると解き、ついてるよ、と抜き取り、ほら、と胸に
押しつけてきた。濃い睫毛をばちばちと瞬いて、軽く顎を上げて言う。

「外せよ。行くんだろ？俺と」

通学時間帯にスクール行きと逆方向のチューブに乗るには、
伝統の白い胸リボンが悪目立ちする。
校名を連呼して歩いているようなものだ。

「行くよ。おまえと」

レンカクに会えなくて。1時限目がジムで。
スクールに行くのが面倒くさくなって、僕とどこかに行こうかなんて。
そんなの...

「美術館のキューバー。クラッシュストロベリー始めたかなあ？」

「まだだろ。いつもアドベントに入ってからだよ」

そんなの、
僕の思っていた通りなんだけど。

「そういうのよく覚えてるよな？」

「アビが忘れすぎなんだよ」

そんなの、
僕が計画した通りなんだけど。

制靴に引っかけていたウォーターパウチの蓋を捻り開封する。
雪の結晶とホッキョクグマのイラスト。いつも同じスパークリングタイプの薄荷水。
ちいさくひとくち含んで、飲み込んだ。
一通りを見ていた僕を勘違いして、おまえも飲む？なんて訊いてくる。

レンカクには9両目で会った。白いセーラーカラー。
高身長、アッシュブロンドの髪、翡翠色の瞳、肩幅。
ストライプの腕章はたぶん模範生の証。
あんなに目立つ男、見逃すわけがない。
僕と目が合つて、にやりと笑った。
トゥースペーストのCMみたいなわざとらしい笑顔。
初めて会った時からいけすかないヤツだった。

「おまえも飲む？」

返事せずにいたらよこされたから、ノズルを口に含んだ。
清涼感と僅かな甘みが口内に広がる。冷たい。
それで喉が渴いていたことに気が付いた。
アビが含んでいたものだと思うと喉が渴いた。
インダイレクトキス...って言うんだっけ。
紙式書籍で読んだ。

次のステーションまで0.7マイルの表示。

チューブが減速している。鼓膜に感じる重力が弱くなる。
車窓の雪景色のグラフィックスが消えて、
停止までの距離と到着時間のカウントダウンに切り替わる。

「クラッシュストロベリーとショコラのムースが食べたい」
「だからまだやってないって」

まもなくリトルソウル。こちら側のドアが開きます。と
擬人化されたチューブがコミカルな声で告げた。

「ライムスノウ&ハニーでもいい」
「それならあるけど」

アビは踏みつぶしていたローファーの踵をとんとん、と正して、
制靴を両肩にかけ直した。ピンクブラウンの前髪を直して、同じ色の睫毛をぱち
ぱちしてkeитайに反映させた自分の姿をチェックする。

今日も俺、格好いいかなあ。
格好いい格好いい。大丈夫だよ。
今年もベストスチューデント獲れるかなあ。
獲れる獲れる。連勝だよ。

彼のピンクブラウンの髪は希少種(R)に登録されている。
僕の真っ黒な髪と真っ黒の瞳はレッドリストに登録されていて、危急種(V)にあたる。
僕も彼も保護者の所得に関係なく優先的に就学支援と医療支援を受けられる。
ただ人種的に珍しいというだけで国から手厚く保護されている。

警告音の後に二重ドアが開いた。

ウォーターパウチの蓋を戻していた僕の手首を掴んで引っ張る。

「降りるぞ、トキ。ぼーっとすんなよ」

わかってるよ、と答える前に、走るぞ、と
けしかけてくるから、僕は笑った。

彼はレンカクに恋をしている。
僕もレンカクに恋をしている。
...ことになっている。

クラッシュストロベリーとショコラのムースはまだ始まっていない。
ライムスノウ&ハニーの販売はまだ終わっていない。
...のは、本当のこと。

fin.